

cue

14



特集 万博と床

藤本壮介氏インタビュー

建築家/2025年日本国際博覧会 会場デザインプロデューサー



床の記憶
MESSAGE FROM FLOORS.

53

小さい頃にダイニングテーブルから
アイロンを落としてしまいました。

アイロンの尖ったほうが床に刺さって
大きな穴が開いてしまいました。

先日、私の子供が同じような場所にアイロンを落として
同じような傷がついて、みんなで笑いました。



と万 床博

特集

「建築万博」とも称される2025年大阪・関西万博では、世界的に活躍する建築家やクリエイターたちが参画し、個性豊かなパビリオンが数多く建ち並びます。こうした建築の多くで木材がふんだんに使われ、木質フローリングも随所に取り入れられています。当社の土足対応フローリング「MESSAGE」シリーズも、各パビリオンのコンセプトに沿ったさまざまなパビリオンに採用されました。

今回のcueでは、「万博と床」をテーマに、建築における床の本質と、その可能性をあらためて見つけ直します。世界の注目が集まるこの舞台で、床という存在の意味を今一度考え直すきっかけとなれば幸いです。

(文)取材・西村山野

藤本壮介

建築家

2025年日本国際博覧会
会場デザインプロデューサー

床に刻まれる記憶

2025年大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーを務め、大屋根リングの設計監修を担った建築家・藤本壮介氏に、「床」の本質と万博に込めた想いを語っていただきました。

床が生み出す「場」の力

建築家としてこれまで様々な空間を設計してきましたが、常に意識してきたのが「床」の存在です。建築の中で最も根源的であり、人にとってもっとも身近な要素だと感じています。床さえあれば、そこに「場」が生まれる。壁や屋根がなくても、人が立ち、歩き、座ることで、その空間は建築として立ち上がるのです。

床は、人の営みの出発点です。一見、何気なく通り過ぎる場所ですが、実は人間の身体が最も長く触れている建築要素であり、空間の本質が宿る場所だと考えています。

僕自身、北海道の自然豊かな環境で育ち、木に親しんできました。小学校2年のとき、無垢の木の床がある家に引っ越して、その温かみと広がりにより自由を感じたのを今でも覚えています。

床は時間とともに生きる

20年ほど前、妻の実家を設計したときに木のフローリングを使用しました。今でも帰省するた



建築家 / 2025日本国際博覧会
会場デザインプロデューサー

藤本壮介

Sou Fujimoto

1971年 北海道生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年に藤本壮介建築設計事務所を設立。2014年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞(ラルブル・プラン)に続き、2015、2017、2018年にもヨーロッパ各国の国際設計競技で最優秀賞を受賞。国内では、2024年に、「(仮称)国際センター駅北地区複合施設基本設計業務委託」の基本設計者に特定。現在は「2025年大阪・関西万博」の会場デザインプロデューサーを務める。

万博来場者の記憶を刻む、大屋根リングの床。

びに、そこに残る傷や擦れ、足跡のような痕跡が目に入ります。人の暮らしが静かに刻まれ、空間に深みを与えている。その変化を見ていると、「床は素材を超えて、時間とともに生きる存在なのだ」と実感します。

最近の床材は美しく、メンテナンス性にも優れています。それ自体は素晴らしいことですが、一方で、昔の木の床には、人工物では得られない「時間の積層」のような魅力がありました。木は「劣化」ではなく「変化」していく素材です。その変化に美しさを見いだすことができれば、建築との向き合い方も変わってくる。傷や擦れでさえ、そこに生きた人々の痕跡として、空間を豊かにしていくんです。

こうした考え方は、住宅だけでなく、公共建築でも同じです。たとえば、ある施設が50年後も使われ続けていて、かつて通っていた子どもが親となり、今度は自分の子どもと訪れる。そんな世代を越えた記憶が、床の上に積み重なっているとしたら、それはかけがえのない価値になるはずです。

床に残る痕跡が、 未来への希望になる

僕はパリにも10年ほど事務所を構えていて、今も頻繁に通っています。ヨーロッパの街を歩

いていると、「自分が死んだあともこの場所が残る」という安心感がある。そこにあるのは、痕跡が未来に残っていくという希望。床もまた、人の時間と未来をつなぐ、静かな媒介になれるのだと思います。

だからこそ、あらためて思うのです。床には、できる限り上質な素材を使いたい。そして、そうした素材を活かしながら、時間の経過を受け止め、なお魅力を増していけるような空間をつくっていきたい。そういう床がある建築は、やはり強いと思います。

大屋根リングに込めた想い

大阪・関西万博では、世界の多様な価値観が「ひとつの円」でつながる象徴として、大屋根リングを設計しました。そしてその屋上もまた、「床」として設計されています。

直径約675メートル(外径)、円周約2キロにもおよぶリングの上を人が歩き、空を見上げ、地上を俯瞰する。そこは、空と世界をつなぐ「開かれた床」です。

この床部分には、すべて国産の木材を使用しました。日本の豊かな森林資源と、木造建築の文化を背景に、木の持つ価値と可能性を世界へ伝えたいという想いを込めました。

夢洲に立つたとき、皆が口をそろえて言った





提供: 公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、株式会社大林組 / 撮影: 株式会社伸和

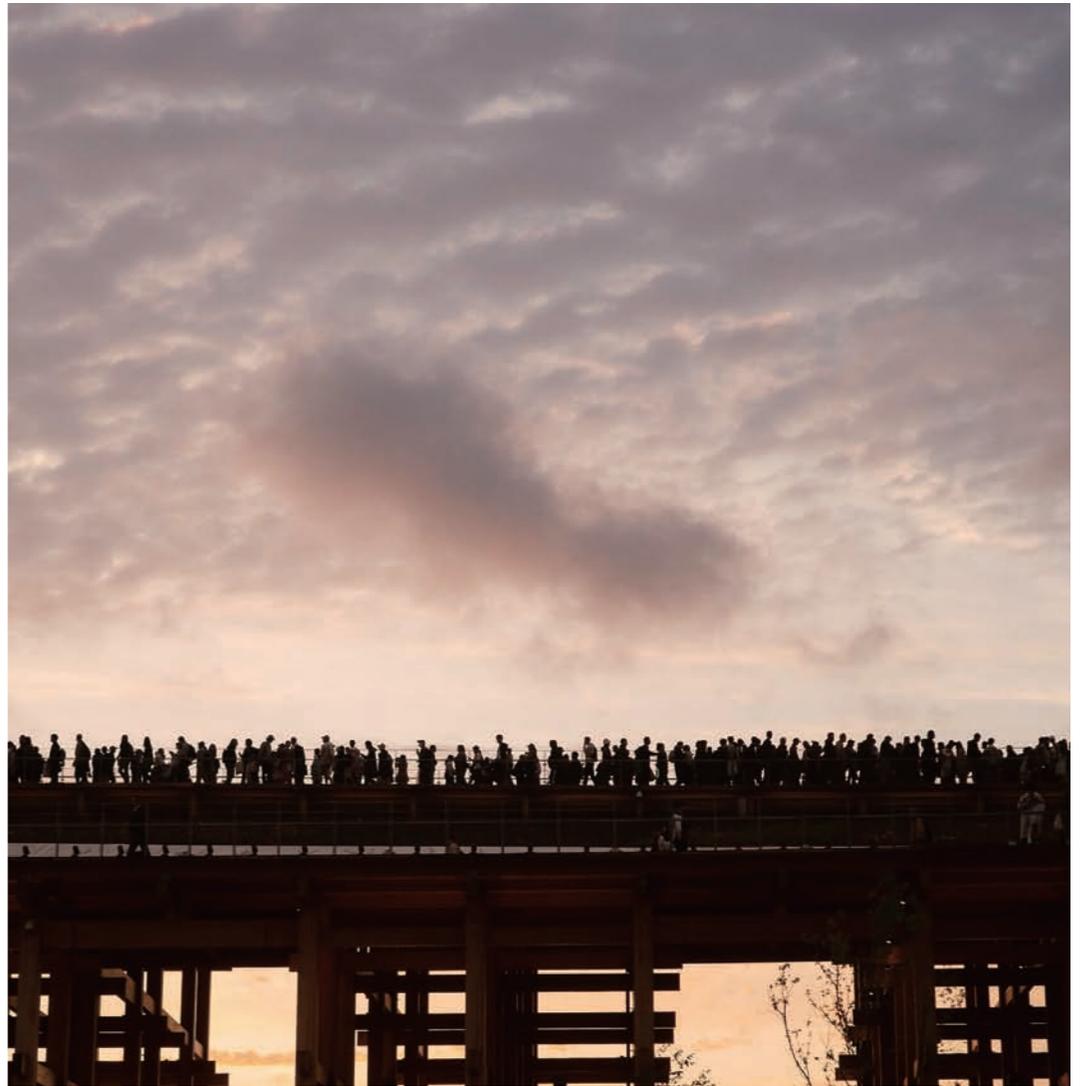
のが「空が広い」ということでした。その空の存在にかなうものはない。そう感じて、リングの中央をくり抜き、空を切り取るようなデザインにしました。

人々が円環状の床に立ち、空を囲むように共有する。まるで空を持ち上げるような建築。それは、世界中の人々をつなげる象徴になると考えました。空には国境がありません。その空を囲みながら、誰もが自由に歩き、交流する。そんな未来への希望が、このリングの床には込められています。

建築は未来への手紙

僕は建築を「未来への手紙」だと思っています。完成した瞬間が終わりではなく、そこから人々の営みが始まり、空間が育っていく。その積み重ねが、やがて「記憶」となって空間に残っていくんです。

そしてその記憶が、最も濃く刻まれるのが床だと思います。丁寧につくられた上質な床は、人々の人生に寄り添い、記憶を次の世代へと手渡していく器になる。公共建築でも住宅でも、床は「記憶の媒体」として、これからの建築に欠かせない存在になるはずです。



天然木 × 耐久性

土足空間に「本物の木」を使うという選択
— 美しさと耐久性を兼ね備えた、木の床の可能性 —

藤本さんのお話にもあったように、床は「空間の記憶を刻む場所」。上質な本物の木を使った床には、時間とともに深まる風合いや経年変化を楽しめる、自然素材ならではの魅力があります。

朝日ウッドテックでも、商業施設や公共施設など多くの人が行き交う空間において、足元から木のぬくもりを感じてもらいたいという思いから、「土足対応フローリング」の開発に取り組んできました。しかし、土足空間で木を使う上で避けて通れないのが「耐久性」の問題。本物の木が持つやわらかさや温かみを大切にしながらも、長く使えるように、加工技術を加える必要があります。

たとえば、土足用フローリングには、住宅用に比べてはるかに強い表面塗装が求められます。これは、摩耗や傷への耐久性を高めるためや、靴底やカーットのタイヤによる黒ずみ汚れを防ぐためです。また、屋外からの雨水が持ち込まれることも想定されるため、塗膜の剥がれにくさも重要な性能のひとつとなります。

とはいえ、耐久性ばかりを追い求めて木の質感が損なわれては、本物の木を使う意味がありません。木の自然な表情はそのままに、土足環境にも耐えうる性能を両立したフローリングを目指すことが大切です。

こうした木の魅力と技術を両立させたフローリングは、実際に多くの人々が訪れる空間でも採用が進んでいます。ここからは、土足対応フローリングが実際に使われた、大阪・関西万博のパビリオン事例をご紹介します。



イタリアパビリオン



ドイツパビリオン

© German Pavilion / Hotaka Matsumura



オーストリアパビリオン



大阪ヘルスケアパビリオン

オーストリアパビリオン

テーマ Compose the Future (未来を作曲)

音楽をテーマに未来社会のデザインを提示。五線譜を模した螺旋構造の建築で、参加型の演出が特徴。

採用箇所 3Fレストラン

採用床材 メッセージオーダー ヘリンボーン 挽き板
ブラックウォルナット 特注サイズ 110㎡



設計に活かすヒント

音楽をテーマにした本パビリオンのレストランでは、クラシック音楽の都・ウィーンを想起させるような、落ち着いた空間が広がっていました。床には、ヨーロッパ貴族の邸宅でも用いられてきたヘリンボーン貼りのブラックウォルナットを採用。深みのある木目が、赤系の天井仕上げと美しく調和し、空間に品格と非日常感をもたらしています。素材の色合いや貼り方向によって、歴史や文化を想起させる場をつくる、そんな空間演出のヒントを与えてくれる事例です。



空間を支える「床」の力

—4つのパビリオンから見える可能性—

2025年大阪・関西万博では、6つのパビリオンに当社床材が採用されました。今回はその中から4つのパビリオンをご紹介します。

大阪ヘルスケアパビリオン

テーマ REBORN

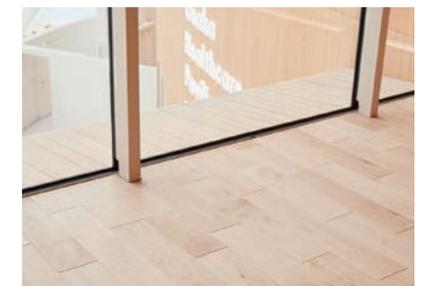
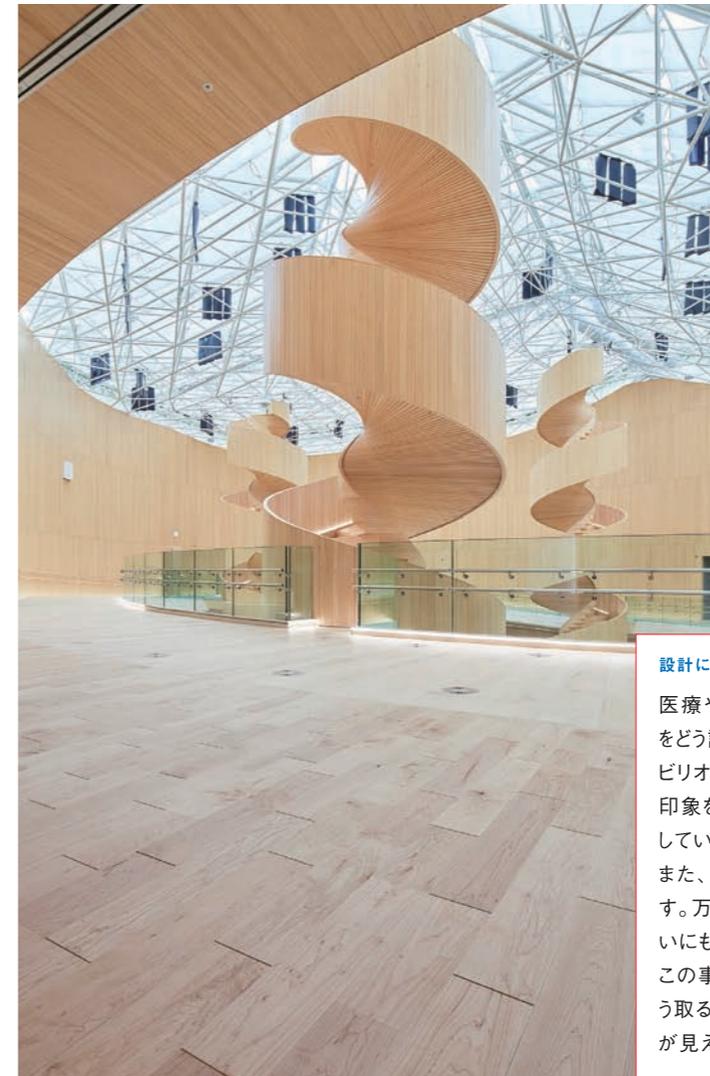
iPS細胞や再生医療、都市生活の未来を体験。大阪府・大阪市が企業や大学など一体となり出展。

採用箇所 2Fホール、2F「ミライの自分」エリア通路

採用床材 メッセージハード 挽き板
ハードメイプル スタンダード 215㎡



提供:(公社)大阪パビリオン



設計に活かすヒント

医療や健康を主題とする空間では、清潔感や安心感をどう設計に落とし込むかが重要なテーマです。このパビリオンでは、ハードメイプルの床材が明るく開放的な印象を与え、空間全体の穏やかな雰囲気づくりに寄与していると感じました。

また、当社では定期的に現地の状況を確認しています。万博でも人気のパビリオンで来場者数が非常に多いにもかかわらず、床の美観が良好に保たれています。この事例から、意匠性とメンテナンス性のバランスをどう取るかという、公共性の高い施設設計におけるヒントが見えてくるように思います。

イタリアパビリオン

テーマ L'Arte Rigenera la Vita(芸術が生命を再生する)

アートを軸に、テクノロジーやルネサンス思想と融合。都市文化や生命の再生を、空間として表現する展示構成。

採用箇所 シアタールーム(階段兼ベンチ、ダンスフロア)

採用床材 メッセージオーダー 挽き板
 オーク スタンダード 特注色 70㎡
 メッセージハード 挽き板
 オーク/ホワイト 90㎡



設計に活かすヒント

芸術と再生をテーマにした本パビリオンでは、展示室ではなくシアタールームやダンスフロアといった演出空間に木床が用いられています。黄味を抑えたグレージュ系のオーク材が、落ち着いた洗練を感じさせます。展示室ではないので直接的な対比はないものの、大理石の展示作品なども調和する色合いでパビリオン全体の印象を整え、場の質を高めていました。素材の質感や色調で空間に奥行きを与える設計手法として、参考になる点が多くありました。

ドイツパビリオン

テーマ わ!ドイツ(循環経済/サーキュラーエコノミー)

パビリオン全体で資源の循環を表現。「環・和・わ!」の三重の意味を持ち、体験型で持続可能性を学ぶ設計。

採用箇所 1Fレストラン、2F展示スペース

採用床材 メッセージオーダー 挽き板
 ハードメイプル スタンダード 330㎡
 ブラックチェリー スタンダード 30㎡
 ハードメイプル ラスティック 30㎡



設計に活かすヒント

パビリオン全体に見られる曲線的なデザインは、「環(わ)」の思想を建築として視覚化したもの。レストランの床もそれに呼応し、円形に切り出した部材を、目地を合わせて突きつけで納めるなど、設計意図と施工技術の融合が際立っていました。異なる樹種のフローリングを使いながらも(P10参照)空間全体に統一感があり、素材選定と演出のバランスも巧みです。循環をテーマとした建築のあり方に、意匠と工法の両面から学びが得られる事例です。



木の温もりが息づく、大学のラーニングコモンズ

エントランスをくぐると、まず目に飛び込んでくるのは、二階まで見渡せる大きな吹き抜け。その中心には、存在感のある階段と、それに連なる階段状のベンチが配置されています。そのスケール感に、思わず息をのむほどの迫力を感じました。

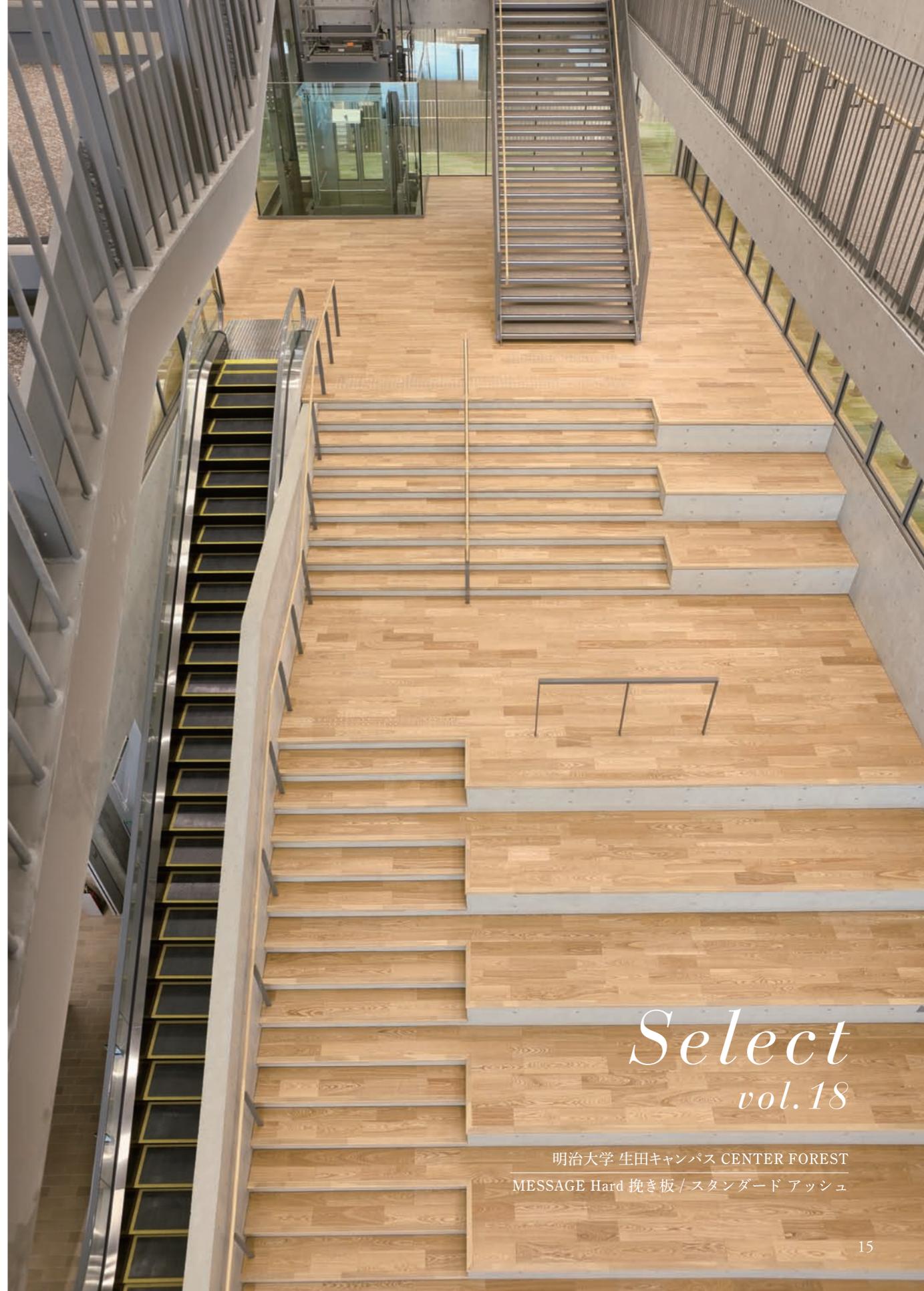
階段に近づいてみると、アッシュ材ならではの柔らかな木肌と、やさしい色合いがふわりと目に届きます。自然と手を触れたくなり、つい座ってみたくなる——そんな魅力がこの場所にはあります。

設計を担当された茂住様は、当初のプランを次のように振り返ります。「当初は、床材として御影石タイル（花崗岩）を提案していましたが、明治大学様から『もっと温かみのある空間にしたい』というご要望をいただきました。その際に出会ったのが、土足対応のフローリング材『メッセージハード』です。」

そして、完成した空間を見て、「天然木がもたらす柔らかな印象が、空間全体に心地よく広がっていると感じました。特に、若い世代が集う大学のような場所では、無機質な素材よりも、木の温もりや柔らかさを感じられるデザインのほうが、より自然に空間に馴染むことを、あらためて実感しました。」と語ってくださいました。

この場所は、学生たちがくつろぎ、思い思いに過ごす「ラーニングコモンズ」としての役割を担っています。だからこそ、この空間には木の温もりや癒しの要素が必要だったのだと、今あらためて感じています。「メッセージハード」をご提案できて、本当によかったと思います。

（文・小林）



Select
vol.18

明治大学 生田キャンパス CENTER FOREST
MESSAGE Hard 挽き板 / スタンダード アッシュ

ミラノデザインウィーク2025レポート

世界最大のデザインの祭典「ミラノデザインウィーク」は、郊外の「ミラノサローネ」と市内の「フォーリサローネ」から成る一大イベントです。近年はサステナビリティの観点から、街中で開催されるフォーリが主流となり、人気会場に長蛇の列ができるなど、休む間もないハードな視察となりました。今年では約80社を訪問し、空間構成における木材の役割に注目しながら、最新のインテリアトレンドを調査。木質建材メーカーの視点でその傾向をご紹介します。



有機的素材×低彩度、
黒を効かせた強コントラスト
二極化する空間配色トレンド

全体として、空間デザインは大きく二極化している印象を受けました。

ひとつは、明度がやや高く、彩度を抑えた柔らかな空間。薄いグレーやホワイトを基調に、控えめなアクセントカラーを加えた優しい配色や、ホワイトからブラウンへのグラデーションが特徴です。自然素材やマットな質感が多く使われ、チョコレートやコーヒーを思わせるブラウン系の色合いがトレンドに。無塗装のような仕上げのウォルナット材との相性も良好です。

もう一方は、黒を効かせた強いコントラストが印象的なラグジュアリー空間。ブラックに着色されたオーク、アッシュ、エルム材の使用が目立ちました。

彩度を抑えた穏やかな空間と、黒を基調とした力強い空間。どちらも木材との関係性が重要な要素となっています。

黒が効いた強コントラスト配色



Poliform

有機的な素材を活かした低彩度配色



FLEXFORM



B&B Italia



porada



フィエラに出展していたmoooi。干し草の姿をモチーフにした新作チェア。ノスタルジーと現代を融合させたデザイン。配色や魅せ方も含め今年を象徴するスタイリング。

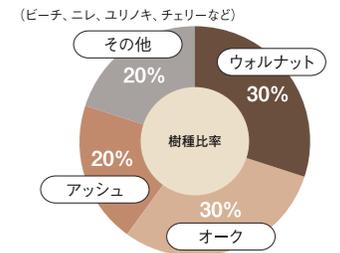
FLEXFORM 2024年と2025年の比較



今年の新作は、屋内外の境界線を曖昧にし、自然に溶け込むような家具の配色や素材が採用されています。



ウォルナットとオークのインビジブル仕上げが主流に
ブラック着色も引き続きトレンド



樹種はウォルナットとオークが大半を占め、いずれも主に突き板として使用されています。表情は節やキャラクターの少ない、整った美しさが際立っています。

仕上げは昨年続き、「インビジブル仕上げ（無塗装風）」が多く見られ、ウォルナット・オーク・アッシュ材を中心に、低彩度空間に自然と溶け込んでいました。

一方で、オーク・アッシュ・エルム材に「ブラック着色」を施した家具やフローリング、壁材も多く、強いコントラストを生むアクセントとして機能しています。

また、木材に限らず、多様な素材を組み合わせそれぞれ質感や風合いを引き出すスタイルが定着しており、素材そのものの魅力を活かす表現が印象的なミラノデザインウィークでした。



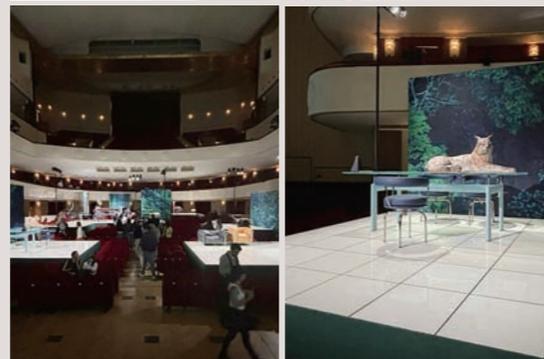
ルイ・ヴィトンが2012年から展開している家具・インテリアコレクション、「Objets Nomades」。今年はブランド初のホームコレクションを発表。



エルメスは日本の伝統的な木工技術である「曲木」を利用した杉材のラウンドテーブルを発表。軸をずらし、動きのあるアイテムとなっています。



市内に初の旗艦ストアをオープンしたmooodi。らしさを感じさせるインパクトの強いスタイリング。ブラック着色フローリングが採用されています。



cassinaはミッドセンチュリーの巨匠、コルビジエ・シャルロットペリアンの名作コレクション60周年を記念したイベント「staging modernity」を開催。

有機的な素材を活かした低彩度配色



低彩度な空間にはインビジブルな仕上げの他、マットな仕上げやホワイトを微着色して白木のような仕上げで表現された木材が採用される傾向。

黒が効いた強コントラスト配色



熱処理して深みのある褐色の色合いを表現したものから墨色、ブラック100%なものまで。木目を活かしたブラック着色が採用されています。



時代を超えて愛され続けるセミアコの名器

エレクトリックギター誕生

エレクトリックギターの第一号は、従来の生ギターにピックアップ(弦の振動を電気信号に変えてアンプから音を出す)を付けたギターだけのものでフルアコースティックギター(通称:フルアコ)と呼ばれています。しかしボディにピックアップを付けただけのフルアコでは、ポップミュージックの演奏等で大きな音を出そうとすると、アンプから出された音に楽器が共振して「ハウリング」という耳障りな音を出しやすという難点がありました。そこで生まれたのがソリッドギターです。1枚の板からボディを削り出しギター本体の空洞を無くす事で共振を起しにくくする事にしました。このソリッドギターは大成功しますが、一方では「フルアコースティックの様な暖かみのある音が欲しい」という声も寄せられていました。

セミアコースティックギター誕生

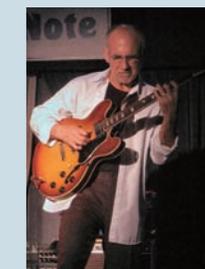
1958年にギブソン社から『ソリッドボディにアコースティックサウンドを加える』というコンセプトを基に世界初のセミアコースティックギターとして発売されたのがES-335です。空洞だったボディの中央部にはセンターブロック(ピックアップ等のパーツを載せる木材)というメイプル材をはめ込む事によってボディ内部を二分しています。すなわちセンターブロックがソリッドギターの要素を持ち、両サイドの空洞部分がフルアコースティックギターの要素を持つ事で、両方の特性を兼ね備えたサウンドを出す事が可能になったのです。更にフルアコースティックの様に軽くて音鳴りの良いスプルースの一枚削り出し単板をボディトップ材として使うと共振しやすくハウリングの可能性も高くなるのでES-335のトップ材には何枚か貼り合わせたメイプル材を採用する事で鳴りを抑え共振を防いでいます。又ネックにはマホガニー、指板にはローズウッドを使う事でギブソン社のソリッドギターの代表的名器でもあるレスポールにも通じるタイトな立ち上がりヤサスティーン(音の伸び)といったサウンドキャラクターとフルアコースティックの豊かで暖かみのある響きがバランスよくミックスされたサウンドに繋がっています。

ES-335の愛用者

フルアコースティックとソリッドギターのメリットを兼ね備えた柔軟な音色のES-335はあらゆるジャンルのミュージシャン達から愛用されています。ブルース界の巨人B.B.キングも初期の頃はES-335の愛用者でした(後に335の派生モデルを「ルシール」と名付け生涯に渡ってのメインギターとなりました)。ジャズ、フュージョン界のスーパーギタリスト ラリー・カールトンはES-335の愛用者として有名で、自身の事をミスター335とも呼ばれています。その他リー・リトナー、チャック・ベリー、エリック・クラプトン、オーティス・ラッシュ、アルヴィン・リー等数え上げればきりがありません。



B.B.キング
(Wikipediaより)



ラリー・カールトン
(Wikipediaより)



秋から鹿児島に引越すこととなり、cue編集委員を卒業することになりました。写真は、大阪にいる間にどうしても行きたかった大阪・関西万博での1枚です。大屋根リングの迫力に圧倒されつつも、今回の特集のお話を知ってからは、自分や家族、また同時期に訪れた多くの人の記憶がここに刻まれていくんだと感じられ、よりリングに愛着が湧きました。

cueの魅力は、朝日ウッドテックの木や床への想いを、様々な角度から紹介できることだと思います。私自身も、冊子づくりに関わる中で木や建築の世界がより好きになりました。

これからは一読者として、cueを通して朝日ウッドテックの想いが皆さまに届いていくのを楽しみにしています！短い間でしたが、本当にありがとうございました。(山野)

編集後記



この夏は、休日になると子どもたちと網とカゴを持って公園で虫を追いかけたり、川で魚を捕まえたりと、自然の中で過ごす時間が増えました。先日は比叡山ドライブウェイの中腹にある「夢見が丘」の「かぶと虫の家」へ。放し飼いにされたたくさんのカブトムシや、ヘラクレスオオカブトなどの珍しい種類も間近で見ることができ、子どもたちと一緒に夢中になって愉しめました。(西村)



今回ご紹介したB.B.キングの名盤と言えば『Live At The Regal』が有名ですが、個人的には1971年発売の『Live In Cook County Jail』の方を良く聴いています。アメリカ シカゴの刑務所内における熱気溢れるコンサートの模様が収録されているアルバムで、ブルースの名曲「The Thrill Is Gone」も演奏されている為、ブルースの入門編としてもお勧めです。(相原)



夏休みに帰省して、娘二人と「劇場版 鬼滅の刃」を見てきました。マンガを全巻大人買いして、ストーリーは知っていたのですが、映像が綺麗で想像以上に良く感動してしまいました。オリジナルの場面がたくさん追加されていて、むしろマンガを見た人の方が楽しめるかもしれません。年を取って涙腺が弱くなっているので直ぐに泣きそうになり、堪えるのに必死でした。帰りは焼き肉を食べ、娘はご満悦でした。まだまだ暑い日が続きますので、皆さん体調には気を付けましょう。(小林)



cue

14

【cue(キュー) = 手掛かり、きっかけ】

発行日 2025年9月10日
編集長 西村公孝
デザイン 鈴木信輔(ポールド)
発行 朝日ウッドテック株式会社